取材・文／大塚祐希事務所
撮影／大島拓也

# 本音DE ゆうとーみー

## 町家の再生vs.保存

京町家プロデューサーの第一人者として知られる
株式会社くろちく代表・黒竹節人。
住居は文化財指定の町家で、和道の達人として知られる
株式会社冨田屋代表・田中峰子。
町家を通じて京の生活文化を伝えるふたりが、
京都の今と次世代の在り方を語り合う。

第12回の舞台は対談ゲストの黒竹さんが手掛けた「百千足館（ももちたるかん）」2階のお座敷。風流な着物姿の京おとこと京おんな。馴染みの間柄、しかも室町・西陣を拠点とすることから、町家&着物トークが弾んだ

**黒竹** 町家と言えば、田中さんの家が文化財に指定されたそうですね。

**田中** ええ、去年。指定されてはじめて、柱や梁なんかに使われる木材のことを聞いたんです。「西陣道楽」といって、この柱はどこどこの山へ行って選んだ木で…って、そこまでこだわって家建てたりしてたそうですね。

**黒竹** 僕も建築が好きで、そういう家に調査に寄せていただいたりします。桐の特殊な材の床柱とか、まず材料にはこだわってはりますね。さらに、柱の素性もちゃんと考慮に入れて建ててはる。というのはね、木がまだ山に立ってた時と同じ方角を向かせて建築資材として使うと、狂いが出てこないんですよ。今は輸入材、しかも製材したもんばっかりやから、建てる時にはどこで育った木なのか、東西南北どっち向いて立ってたのか、さっぱりわからない。

**田中** 建築家としてのご意見ですね。最近は京都駅前のプラッツ近鉄の中に、町家つくらはったとか。

**黒竹** そうなんです。ビルの7階に600坪の規模で「京町家工房」といって、敷地内にぐるっと町家を建てて、その中でうちの和小物も含めて京らしい商品を並べさしてもろてます。僕としては、京都の伝統工芸品を作ってる職人さんの根強い意識っていうのを、環境も含めてユーザーに提案したいと思って取り組んだんです。ただ実際はビルの中。西陣や室町のように、町家が点在して残ってる環境と一致してない部分はあるんですけど。

**田中** 黒竹さんのいう「環境」って、生活環境のことですね？

**黒竹** ええ。やっぱり「環境」によって意識も心も変わるし、「環境」から生まれてきた作法や儀式もある。そんな生活環境を復活させないと、伝統的なものの良さって理解されないんじゃないかな、と。プラッツの「京町家工房」は、そういう狙いがあるんです。

**田中** 実際、町家が並ぶ西陣に住んでますと、それが当たり前になってしもて。でも、伝統文化に携わってる本人が、生活環境の大切さを一番わかってなアカンのでしょうね。再生を目指す人と保存してる人の差って、こういう意識の違いですやろか。

**黒竹** その差がなくなるとええですね。

**田中** でも、今私がやってるマナースクールは、再生サイドの部分も大きいですよ。実際に西陣の街並み見て、古い家へ来てもろて、さらに着物の良さをわかってもらう…。

**黒竹** そうですね。ほんまにええ環境。

**田中** 着物も実際に「着る」という作業なしでは、面白さをわかってもらえませんからね。うちのスクールでは、着付だけじゃなく、着物姿が想定されるケーススタディもやってるんです。例えば、お茶の席での作法とか、お香席、能観賞…。あらゆる場面で京おんなとして自信の持てる立ち居振舞いができるよう、実際にそういった席を体験してもらっています。

**黒竹** 保存する側の人も、やっぱりいろいろ考えてはりますよね。織物の話は別として、町家再生の面では、西陣でも藍染の職人さんがいらっしゃいますし、最近では現代の若い芸術家の方も入ってこられて。でも、もうちょっと具体的にね。そのためにも田中さんに頑張ってもらわんと…

**田中** …やっぱり保存サイドに戻ろかな（笑）。

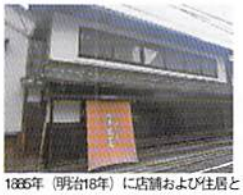
伝統意匠建築家
くろたけさだと
**黒竹節人**

室町を拠点に京町家をプロデュースする㈱くろちく代表取締役。クラフト工房＆おもてなしカフェの「百千足館（ももちたるかん）」、京おばんざい懐石の「百足屋（むかでや）」を手掛けることでも有名。一般の古い町家の建て直しも行う。現在、協同組合「若座百衆」理事長、社団法人「国際工芸センター」常務理事、京町家再生研究会会員

「和道　古都の風
きものマナースクール」学院長
たなかみねこ
**田中峰子**

着物スクールの学院長であると同時に、西陣の産地問屋・株式会社冨田屋の代表取締役もつとめ多忙を極める。大阪より京のこの旧家へ嫁ぎ、13代目として家業を受け継ぎ現在に至る。また、和道では毎日新聞主宰の毎日フィニシングスクール、サンケイリビング文化センターの講師も務め、活躍中。黒竹氏とは旧知の間柄

古い町家を復元した「百足屋」。内部には通り庭やおくどさん、井戸の滑車などが残り、伝統建築美の粋を今に伝える。最新の作品はプラッツ近鉄7Fの「京町家工房」



1885年（明治18年）に店舗および住居として、九代目が建てた西陣特有の商家様式。武者小路千家官休庵九代家元の命名による茶室「楽寿」（1905年築）もある。1999年国の登録有形文化財に指定される

取材地／**百千足館**（ももちたるかん）

古い町家の再生を手掛ける東竹さんが、5年前に新築で建てたお約手前の格子戸を開ければカフェ。水打ちされた美しい露地を抜ければクラフトショップがあり、一般の人が気軽に足を運べるようになっている。

## 御膳

お昼のおばんざい懐石コース **新町5000円**（税別）

**前菜** 三種 **向付** 二種 **先付** 鯵丸仕立 焼もち 芽葱
**炊合** 生節煮 筍煮 ぜんまい信田巻 高野煮 蕗木の芽
**焼物** 鈴木の芽焼 鯖の葉じゃこ煮 愛知牛
**油物** 海老と烏賊丸揚げ 油目木の芽揚げ
桜の葉 たらの芽 レモン 塩
**酢物** 赤貝 取貝 白魚 胡瓜 針人参 なた豆 土佐酢
**御飯** 黒豆おこわ **香の物** 三種 **水物** 季節物

わたなべあきら
### 渡辺章さん

15歳の頃より日本料理の世界へ入り、4年前より「百足屋」の総料理長に就任。京のおばんざい懐石料理と題して、室町の旦那衆のおもてなし料理を日々創造。昼は奥様たちの、夜は恋人たちの肥えた舌を喜ばせている

### 百足屋（むかでや）

京都市中京区新町通錦小路上ル百足屋町381
TEL.075・256・7039
11:00～L.O.14:00
17:00～L.O.21:00／水休

「本音DEゆうと～み～」は、京都チャンネル（スカイパーフェクTV!ch726）と本誌CFが共同制作するメディアミックス企画。京都人の本音トークを通じて、京文化の楽しみ方や日常生活の応用法、ビジネスへの活用法を探るのが目的だ。第12回の「黒竹節人vs田中峰子」は京都チャンネルで5／15より数回にわたって放映されている。

企画・制作／京都チャンネル　月刊「CF（シー・エフ）」
構成・演出／「本音DEゆうと～み～ HONNE DE YOU TO ME」企画プロジェクト
●資料請求・加入の問い合わせはスカイパーフェクTV!カスタマーセンターまで。
TEL.0570・039・888（10:00～20:00）

# 次世代はどうしたい？

**黒竹**　町家も含めて、伝統文化を新世紀に生かすには、やはり次世代の理解がなければ。このままだともって10年で消滅します。

**田中**　私たちの若い頃って、必ずお茶やお華やってましたよね。近所にお師匠さんみたいなおばあさんがいらして、その方から教わってた。だからいやいやでも習いに行ったもんですよ。でも、今はエアロビクスやテニス、コンピュータ、と選択肢がすごく増えてます。お金も限られてるから、どこにベイするかってことになれば、伝統文化ってなかなか興味持ってもらえへんような気が。

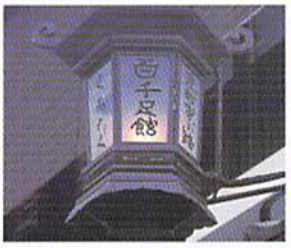
**黒竹**　でもね、僕にはささやかな希望があります。日本人というのは習性があって、流行りだすとバーッといくわけですよ。それが飽きてくるとまた新しいもんを探す。その例が明治維新。文明開化での近代化で鳥丸三条あたりにれんが造りの建物が結構建って。それがその時には珍しかった。ところが百数十年の間になくなってきて、今度は町家が珍しくなってきてる。しかも、町家ブームでひとつの視点ができ、木の文化、日本の伝統文化というものに対する意識も全国的に高まってきてます。理由のひとつは世界の注目度。日本人は世界が認めると、そうかなと思うところがありますから。世界遺産が始まったのもそうですし。そこで、歴史的な建物や文化に接することを若い人たちにステータスとして感じてもらえる、そんな仕掛けを我々の世代でやりたいんです。

**田中**　なるほど。それで若手の人と一緒に何か始めてらしゃるんですね。

**黒竹**　試験的に。僕は料理屋を作ったりはしますが、僕自身が包丁持って料理作ることは出来ませんから。若手で意欲のある人、しかも金ないって人に建物を提供してるんです。

**田中**　その店を経営されてるんじゃなくて？

**黒竹**　ええ。若い人に独立採算で事業をやってもらいます。社員として雇用すると、客が来なかったら「いや社長、今日はね、雨が降ってますさかいにね」って。



**田中**　人のせいにする。

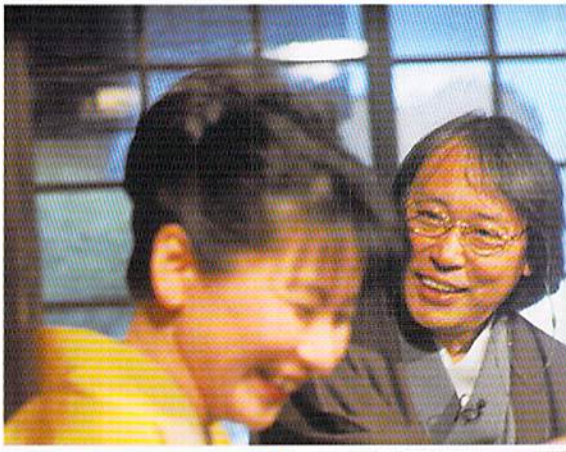
**黒竹**　そうでしょう。だからやりたいという若い子に、リスクを抱えさしてトライさせる。そうするとおのずと努力する。努力しないと新しい発想も生まれませんからね。

**田中**　素晴らしい。

**黒竹**　これも、やり手の思いと我々の文化を保存したいという狙いが、上手くブッキングするのが前提。そうすれば、日本の生活様式や佇まいがすごく伝わっていくと思うんです。

**田中**　そういうこと、どんどんやっていただきたいわ。

**黒竹**　実は田中さんにもぜひやっていただきたいことがあるんです。それは学校関係。小学校の低学年の子どもに、学校のカリキュラムのひとつとして着付を教えてほしいんです。着物はほれ、呉服業界ようさん余ってると思うから。10歳前後の子が着物を着れるようになったら、10年後には二十歳。呉服業界のターゲットじゃないですか。



**田中**　学校で教えるのはいい案ですね。着付教室行ったら、いろんな小物買わされたりして。あれも変ですもんね。お母様やおばあちゃまが使ってらした紐でいいわけですから。

**黒竹**　そうそう。伝統的なものの理解者、将来のユーザーは我々で育てていかなくちゃ。女の子が彼とホテル行っても、脱いだはええが着られへんってことにならんように（笑）。

**田中**　ほんまやね（笑）。実際、着付やマナーを覚えると、みんなすごくキレイにならはる。自信が生まれるからやろね。せやから着付教えるのも、ファーストレディーになってほしいと思いながら。だから、京都の人自身が町家や着物を知ることで、街そのものがみんなに憧れてもらえるようになれば、と思いますね。